

目的 既製の量産化、多様化にともない着装の個性化、多様化が進んで来たが、それは単に、多種の服種を揃えるとは云うのではなく、流行をとり入れながら自分自身をより魅力的にみせ、自己の生活や考えに合った衣服を一つのまとまりのあるワード・ローブとして揃え、それを活用して自己表現のある充実した時間を過ごすことを志向する方向にあると考えられる。そこで、本研究では、ファッションに敏感な若い男女の大学生を対象に、生活意識と服装に関しての選択、購買等に関する調査を行い、日常生活の中での着装の意識と実態をさぐり、男女学生の相違について検討した。

方法 調査は、本学女子学生250名、京都の男子大学生250名計500名を対象に質問紙配布留置法により、1984年7月に行った。調査項目は、基本属性、生活意識と態度、着装意識と態度、並に日常に着用している服装と嗜好(日常学生が着用している服装と髪型より予備調査によりクタイプを選び、これを資料としてデザイン画に表して選ばせた。)である。調査データを項目別に、単純集計、クロス集計し、サンプル全体の分布の把握および相関係数の算出と因子分析を行い、男女学生の比較検討を行った。

結果 日常の着装で好ましく思っている着方では男女共通して、明るく軽快で親しみやすく、シンプルとなっている。男女の着方で異なるものは女性はやさしく、上品で流行のものを好み、男性では男っぽく、スポーティな着方を好んでいる。着装の意識と服装の選択の因子分析の結果では、男女学生共に第1軸は対人意識と着装の評価に関する軸であった。女子は、「他人から見た自分の服装」男子は「男性の服装が気になる」が荷重率が最も高い。